

〔書評〕

「秀吉を襲った大地震

地震考古学で戦国史を読む」

寒川 旭 著

(平凡社新書 504, 2010 年平凡社発行; 全 277 ページ; ISBN 978-4-582-85504-3)

三ヶ田 均*・亀井 志織*

寒川旭氏による、地震考古学と歴史を融合させた良書が本書である。寒川氏は前作「地震の日本史」では、我が国に数多く発生した被害地震がいかに日本の歴史に影響していたかを具体的に記載し、温故知新的に将来に向けての地震との共生を提言した(三ヶ田, 2008)。この日本の過去数 1000 年の歴史を振り返る作業に対し、本書は室町時代の末期から安土桃山時代に至る豊臣秀吉の時代に焦点を当てた。この時代に生きた織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という、我が国の歴史を語る上で欠かすことのできない武将と地震の関係に注目している。それにしても、寒川氏の地震に対する想いの深さ、歴史に対する造詣の深さに感心するばかりである。おそらく、地質学や地震考古学に携わらなかったとしても、司馬遼太郎のような歴史作家として成功を収められたのではないかと感じさせる文章であった。米国スタンフォード大学の岩石物理学関連の仕事をしているヌーア教授の古代文明の盛衰と地震の関係を明らかにした研究(Nur and Burgess, 2008)、あるいは 1755 年リスボン地震および津波により壊滅的な打撃を受けたことでスペインと争っていた海洋の覇権を英国に譲ることとなったポルトガルの例などと同様に、歴史と地震がいかに関わっているかを明らかにしている。

1995 年 1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震(阪神淡路大震災; M7.3)以前、明治維新後関西地方を中心とする地域で発生した被害地震は濃尾地震(1891 年, M8)、北丹後地震(1927 年, M7.3)、北但馬地震(1925 年 M6.8)、河内大和地震(1936 年, M6.3)、鳥取地震(1943 年, M7.2)、昭和東南海地震(1944 年, M7.9)、三河地震(1945 年, M6.8)、昭和南海地震(1946 年, M8.0)、福井地震(1948 年, M7.1)、吉野地震(1952 年, M6.8)などが

ある。この 100 年の間、地域的には大きな被害が発生するがマグニチュードの大きくない直下型地震やマグニチュードの大きな海溝型地震ではあるが震源が大都市から遠い昭和東南海地震や昭和南海地震などの記録はあるものの、兵庫県南部地震発生前 20 世紀後半の静穏な時期の長さから「関西には地震が少ない」とする風説まで耳にするようになっていた。こうした中発生した 1995 年兵庫県南部地震は、寺田寅彦の言葉とされる「災害は忘れた頃にやってくる」こと、マグニチュードが小さくとも大都市圏直下で一度発生すれば甚大な被害が発生すること、そして、実は関西でも歴史上大きな地震による災害が発生していた記録があることを教えてくれた。特に関西の被害地震に関し、兵庫県南部地震で活動した野島断層・六甲-淡路断層系に隣接する有馬高槻断層帯(有馬高槻構造線: ATTL)の活動が危惧されたのである。この注目の集まった ATTL の過去の活動調査に当たり、寒川氏を中心とする地質調査所(現:産業技術総合研究所)、大学関係者の果たした役割は非常に大きく、最終的に ATTL の活動調査が行われたのである。この調査により、この断層帯が 1000~2000 年に 1 回活動すること、そして最後の活動が 1596 年豊臣秀吉の時代(慶長伏見地震, M 未確定(後述))であったこと、そして 1995 年兵庫県南部地震により変化した地域応力場の影響があったとしても、周期性から考えて直近の ATTL の活動を考え難いことなどの知見が得られている。寒川氏の論文は兵庫県南部地震直後に激増し、その多くが有馬-高槻断層帯に係る調査結果に基づく。本書では、こうした寒川氏の地質学的な成果と、氏の灰色の脳細胞に刻まれた歴史に関する知識を有機的に結実させ、慶長伏見地震の 11 年前に発生した天正地震も取り上げ、特に豊臣秀吉の時代にフォーカスを当てた内容となっている。869 年貞観地震およびその津波災害の調査が進んだきっかけとなったのが、平成 14 年度から実施された文部科学省の「宮城県沖におけるパイロット的重点調査観測」による過去の津波調査であったことは良く知られている。本書に記載のある ATTL の活動調査のきっかけが 1995 年兵庫県南部地震であったことを考えると、地震に関する調査研究の重要性を物語っている。

寒川氏は、本書で先ず天正地震(1586 年, M8)を取り上げ、この地震と羽柴秀吉、山内一豊、佐々成政、前田利家、内ヶ嶋氏理、織田信雄という武将達との関わりを概説する。NHK のドラマ「功名が辻」で山内一豊・千代夫妻が幼い娘を失う天正地震(1586 年, M8)では、

琵琶湖東岸に位置する長浜で地滑りにより市街や長浜城が壊滅的な被害を受けたことが知られている。この小牧・長久手の戦いの約1年半後に発生した天正地震は、琵琶湖周辺よりも現在の富山県、岐阜県、愛知県、三重県での被害が大きい。地震時の地滑り（岩石なだれ？）では、内ヶ嶋氏一族は埋没した帰雲城と命運を共にした。この城は岐阜県の白川地方に位置したが、現在でもその城の場所すら確定していない。富山県の砺波平野は、小競り合いを続けていた前田氏・佐々氏の争いが決着し、木舟城に新しい城主として派遣された優秀な前田氏の血族が、やはり地震時の城および城下の崩壊で命を落としている。三重県桑名市にあった長島城は、やはり天正地震で崩壊し、時の城主織田信雄は、この城を放棄して清洲城に戻る。その後の加藤清正による清洲から尾張名古屋城への移転が現在の名古屋発展の基礎となっていることから、地震が名古屋都市圏形成のきっかけになったのであろう。また、地震による地形変化から地震の半年後に流路が変わった木曽川は、米作を中心とする江戸時代の輪中形成や、薩摩藩のお手伝いによる三川分離策及び堤防建設等の治水に影響を与えたことは間違いない。その一方で本書では、近江坂本から大阪に逃げ帰った秀吉の手紙から、地震の代名詞として「鯰」が使われていたこと、ひょっとすると琵琶湖の代名詞であった鯰が、この天正地震以来使われたのかかもしれないという推論など、史実の中の想像の世界へと読者を誘う。この地震で肝を冷やした秀吉は、この後、初代伏見城（指月山伏見城）や大坂城の建設で、耐震に注意するよう指示を出している。歴史に数多くの記載が残っていることも手伝い、正にエピソードに事欠かない。なお、秀吉は、この地震の後に天下統一を果たしただけでなく、朝鮮出兵も押し進め、栄華を極めることとなる。それから400年後に行われた地震考古学的な調査は、この富山県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県という広大な地域に被害をもたらした天正地震に、阿寺断層帯、庄川断層帯、そして養老-桑名-四日市断層帯の活動が関わっていることを突き止めた。

秀吉の時代の次なる地震は、1596年慶長伏見地震である。本書には記載がないが、慶長伏見地震は9月1日の慶長伊予地震、別府湾にあった瓜生島が地震時に海中に水没したという言い伝えのある9月4日大分地震という中央構造線（MTL）沿いの地震活動に引き続き9月5日に発生した。奇しくも、贅を尽くした豪華絢爛な指月山伏見城の完成直後であり、地震がなければ朝鮮出兵の停

戦に向けて朝鮮からの使節を迎える予定であったことが記述されている。残念ながら、秀吉の命じた耐震補強は、あまり役立たなかったようである。倒壊した伏見城は、指月山より標高の高い木幡山に天守を置く、指月山をも含む巨大な伏見城（木幡山伏見城）として地震直後から再建が開始され、秀吉の生命の尽きる前に完成している。歴史に、もしという仮定を置くことは野暮に過ぎないが、この地震がなければ、木幡山ではなく指月山の伏見城のままで、関ヶ原に駆けつける前に石田三成が徳川方竈城の伏見城攻略で足止めを喰うこともなかったかもしれない。また、天下分け目の決戦が、関ヶ原ではなく、更に東の濃尾平野になったかもしれない。方広寺も大仏も地震で大破することなく、梵鐘鑄造の際に、関ヶ原の決戦の原因となった「国家安康君臣豊楽」の文字が刻まれることもなかったかもしれない。地震の発生しなかった東日本に領地を持つ徳川家康は、災害対策に迫られることなく力を温存し、後に天下を豊臣から奪い取ることに成功していることを考えても、地震がいかに日本の歴史に関わっているかを感じ取ることができる。また駿河トラフから南海まで連動したとも考えられる慶長地震がもう少し早く発生していれば、豊臣氏と徳川氏の決戦が遅くなった或は決戦そのものが行われなかったかもしれない。この慶長伏見地震に関しても、寒川氏らの地震考古学的調査は威力を発揮し、例えば伏見城の倒壊だけでなく、ATTLから六甲断層帯、そして楠本断層、東浦断層、先山断層と淡路島東岸に走る断層群に至る約80kmの領域に地震の痕跡を見出し、この地震のマグニチュードがこれまでの推定値より大きな7.5~8.0の範囲であるとする推察に至っている。内陸地震として、おそらく甚大な災害を引き起こしたであろうことは想像に難くない。小早川秀秋の根返りにより、互角に近い状態であった関ヶ原の戦いは一気に決着がついたが、相手が地震であれば互角も何もなく、発生した瞬間に人間の負けである。また、文書記録がなければ、どのような地震であったかすら後世に解明することもできないが、地震考古学により震源域や震動の大きさある程度推察できることがわかる。本書は、安土桃山時代に人間がいかに地震に蹂躪されたか、発生した地震の規模がどの程度であったか、見事なまでに読者に想像させる力を持っている。

本書では更に慶長伏見地震の後は、過去発生した内陸地震により影響を受けた人間の歴史に触れている。地震による痕跡を留めた芦屋廃寺、西求女塚古墳、志築廃寺の例、や関ヶ原の戦いの後に発生した南海トラフの地震

と考えられる慶長地震や、その津波災害に触れる部分等、寒川氏の著作「地震の日本史」(寒川, 2007) 同様に、日本に生きる人間が地震と共生する必要性を訴えているように読める。地震との共生、という言葉には、制御不能な地震発生を理解し、いざという時に「想定外であった」と言う言葉を発しないよう地震に備え、例え火災や津波に見舞われても生き残る術を常日頃考えておくことに他ならない。三陸地方の「津波でんでんこ」という悲しいが非常に現実的な格言に通じるものがある。

戦国史は、上司・部下の関係、人間関係、戦略、罠、運不運など、現代社会生活に通じる側面を多く感じさせることが多い。中でも、織田・豊臣・徳川による戦国時代の混乱の収拾に寄与した武将の活躍には、躍動感があり、約 60 年前のテレビ放送黎明期から多くのテレビ・ドラマに繰り返し登場する。本書は偉人達の人生のみならず、その業績に果たした地震の役割を詳細に解説している。地球科学・地球工学に携わる研究者・技術者は、おそらく歴史小説と現実の狭間を行き交いつつ読み終えることになるであろう。本書は物理探査の分野へのフィードバックという意味でも、非常に有益な書であると

断言できる。天正地震、慶長伏見地震や南海トラフの巨大地震である慶長地震、前回の東北太平洋沖地震とも考えられる貞観地震の記録は地下に残っているのである。地下を知ることが地震に備えることに他ならず、温故知新的に今後の地震研究にとって有益であるからである。興味のある読者に是非お勧めしたい一冊である。

引用文献

- 三ヶ田 均 (2008) : 書評「地震の日本史-大地は何を語るのか」, 物理探査, 61 (3), 275-276. Nur, A. and Burgess, D. (2008): *Apocalypse: earthquakes, archaeology, and the wrath of God*, Cambridge University Press, 309pp.
- 寒川 旭 (2007) : 「地震の日本史——大地は何を語るのか」, 中央公論社, 中公新書 1922, 268pp.

2011 年 6 月 15 日原稿受付; 2011 年 6 月 29 日受理

* 京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻

〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂 4